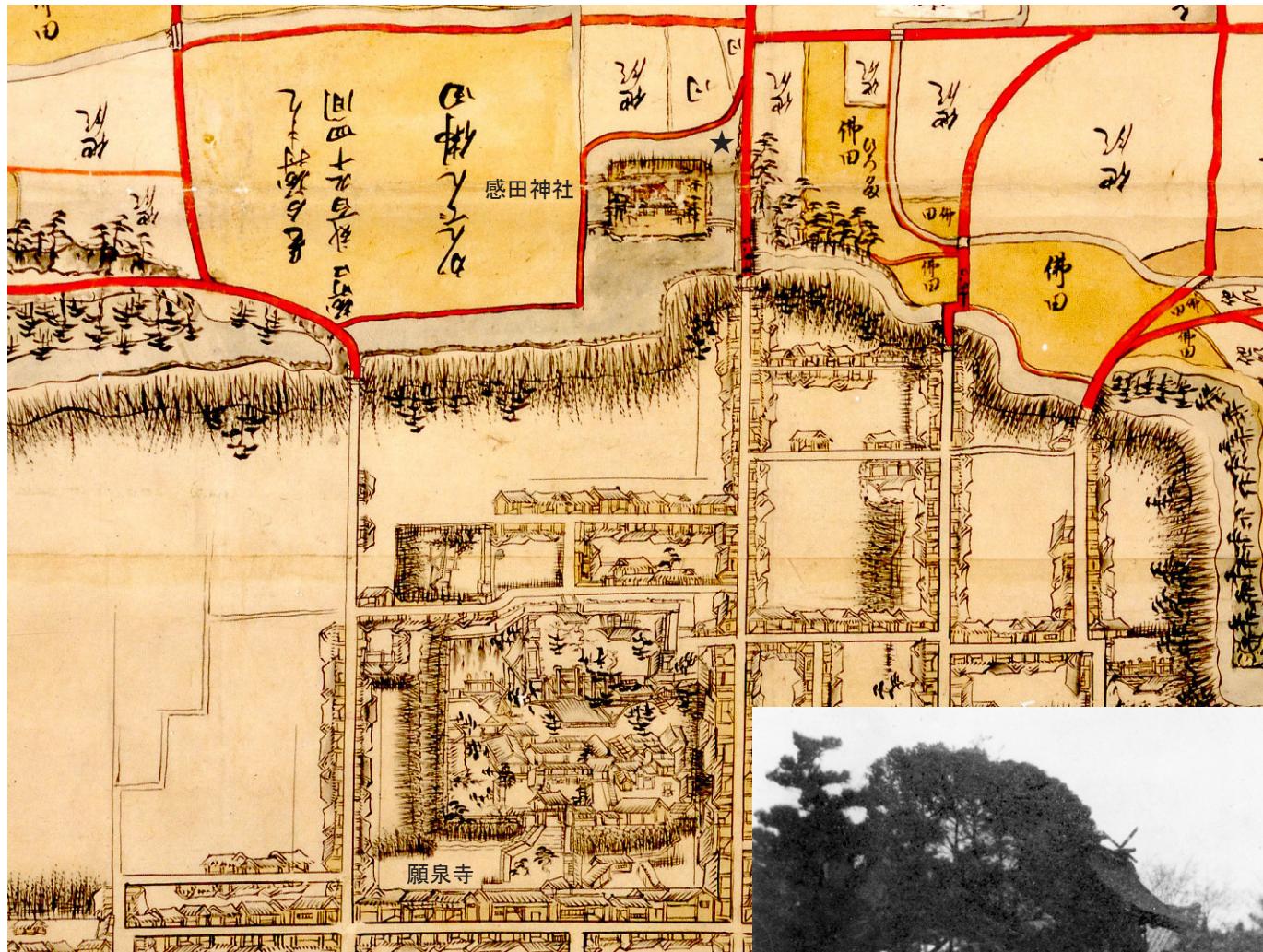


テンプス

2014年（平成26年）52号



慶安元年（1648年）の絵図（感田神社・願泉寺部分拡大図）

もくじ

地図に見る貝塚市 - 貝塚町全図から -

古絵図をひも解く
相良城受け取りと岸和田藩

平成25年度の埋蔵文化財調査

第100回かいづか歴史文化セミナー開催のお知らせ
「春の文化財探訪 寺内町めぐり」

戦前の感田神社南側の濠（絵図の★印の位置）
(写真提供：NPO法人摂河泉地域資源研究所)

地図に見る貝塚市 - 貝塚町全図から -

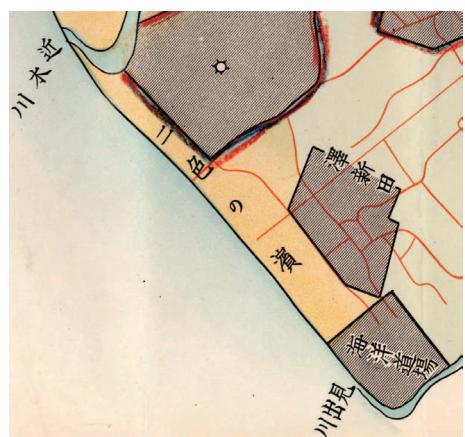


1943年（昭和18年）に市制を施行した貝塚市は、平成25年5月1日をもって市制施行70年を迎えました。今回のテンプスでは、1940年（昭和15年）の西葛城村合併時の貝塚町全図をもとに、市制施行直前の貝塚市域のようすを紹介します。

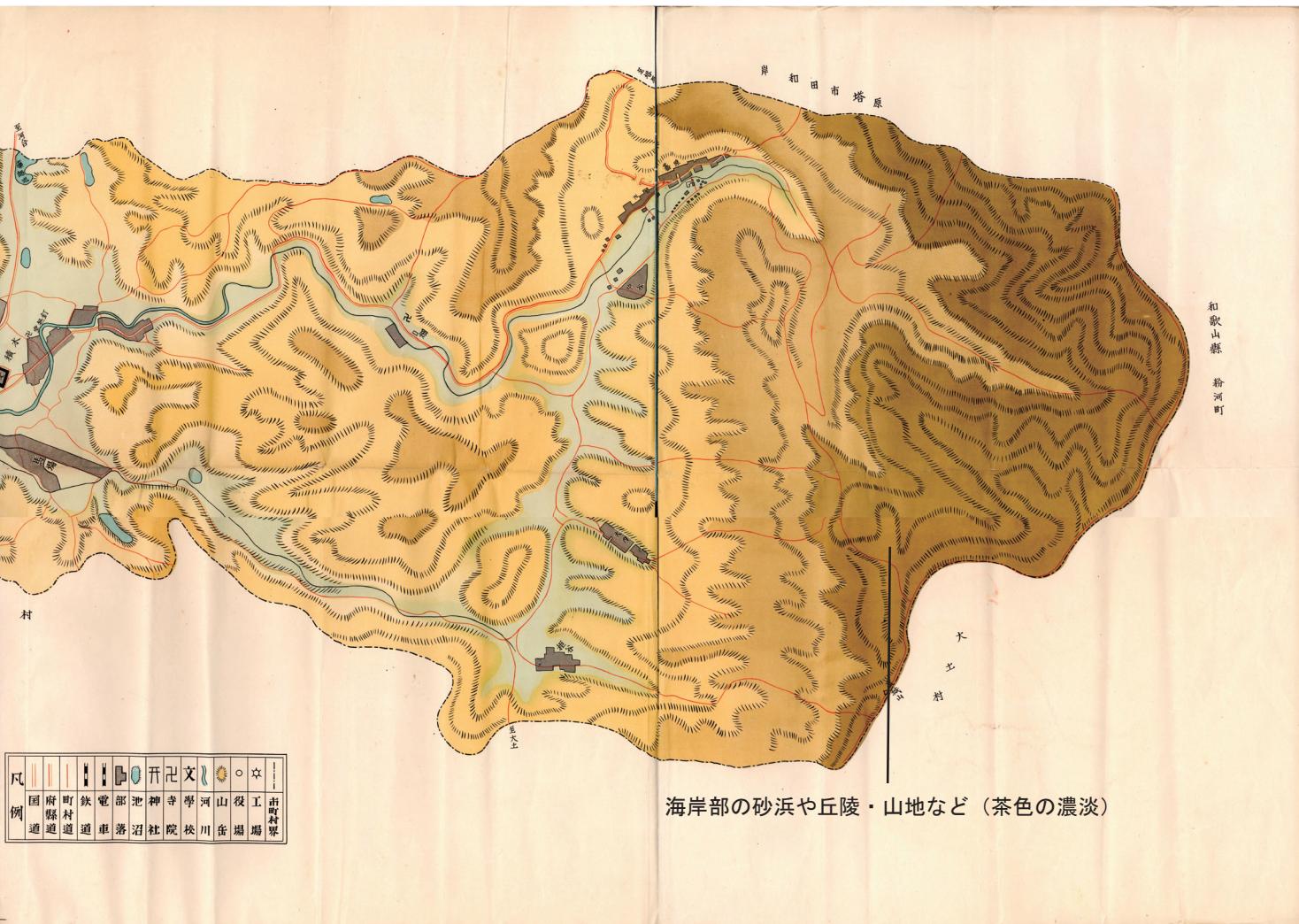
紹介する貝塚町全図は、一万分の一の縮尺で書かれた地図で彩色がなされています。集落地は灰色、道路は赤色、平野部は薄い緑色、河川とため池は水色、海岸部の砂浜や丘陵・山地などは茶色の濃淡で色分けされています。また、地図記号で、鉄道のほか、神社や寺院、学校、役場、工場の位置が示されています。

当時の海岸は、津田から沢の二色の浜にかけてほぼ砂浜が広がり、町境の見出川河口には青少年の海事訓練施設「海洋道場」（右拡大図）がありました。

集落地は、津田から脇浜にかけての南海鉄道より海寄りの部分と、南海鉄道「かいづか」駅周辺の海塚から東・福田・新井・半田、堀・小瀬にかけての広い範囲で市街地化が進んでいた状況が見られます。のちの市役所となる町役場は、この市街地域に含まれる海塚の水間鉄道沿線にありました。



道路は、南海鉄道の海側を走る国道 16 号線（1939 年（昭和 14 年）開通、旧国道 26 号線、現在の府道 204 号堺阪南線）が太い二重線で書かれるほかは、紀州街道、熊野街道、水間街道などが細い二重線で書かれています。

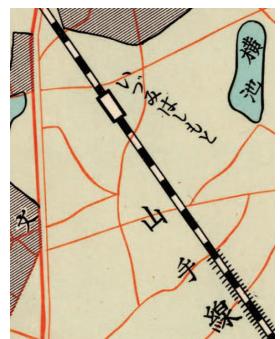


鉄道は、前年の 1939 年に水間鉄道の貝塚駅乗り入れが実現したことで、現在とほぼ同じ状況が見られます。しかし、水間鉄道の駅はいまだ 6 駅のみです。また、現在の JR 阪和線は、この地図が書かれた年に、阪和電鉄が南海鉄道に吸収合併されたことで、南海鉄道の「山手線」として表記されています（右拡大図）。

地図記号の中で最も多い「工場」は、先に述べた南海鉄道「かいづか」駅周辺の市街地をはじめ、海岸部に大規模なものが見られます。また、水間鉄道沿線など内陸部の集落にも小規模な工場が点在し、これらの工場は繊維工業や金属・機械器具工業がその大半を占め、当時の貝塚の産業を特徴づけるものでした。

一方、市域中央部にかけて広がる平野部には未だたくさんのため池が見られ、集落地以外の場所ではのどかな田園風景が広がっていたようですが想像できます。

さて、貝塚市郷土資料展示室（貝塚市民図書館 2 階）では、平成 26 年 3 月 1 日（土）から 4 月 27 日（日）まで、市制施行 70 周年事業として特別展「地図と写真で見る貝塚市」を開催します。今回紹介した貝塚町全図をはじめ、貝塚市域の地図と市内を撮影した写真をもとに、昭和初期以降の市域の変遷やその時々の市内各所の風景などを紹介します。期間中にぜひ一度ご観覧ください。



古絵図をひも解く

◆相良城受け取りと岸和田藩

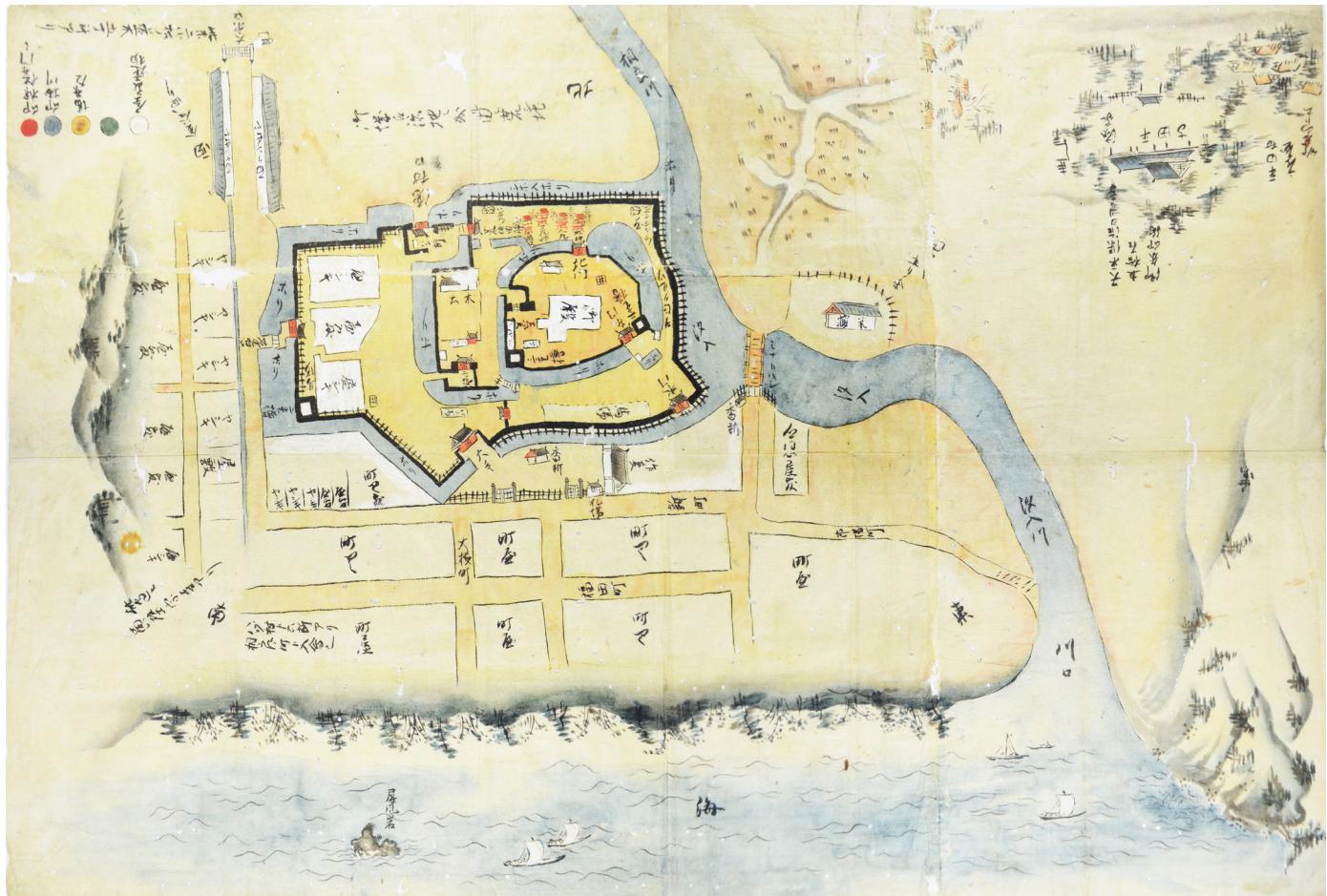


図1 相良城下町絵図 393mm × 575mm <要家文書>

上の絵図【図1】は、海と城下町が確認できるので、一見すると岸和田城下町の絵図かと勘違いしてしまいそうですが、城の北東側に大きな川があつたり、南東側に海が描かれていたりして岸和田とは大きく違います。実はこの絵図、遠江国相良（とおとうみのくにさがら／現在の静岡県牧之原市にある）城下町を描いたものです。しかも、この絵図は岸和田藩の七人庄屋（有力な庄屋のうち上位7家のこと）である畠中村（現在の貝塚市畠中）庄屋源太夫家にのこされていました。七人庄屋の家にのこされていることも不思議ですが、相良と貝塚は直線距離にして約300kmも離れているのに、どうしてこの地の城下町絵図がのこされたのでしょうか。

まず、【図1】の書かれた時期について、絵図そのものに記載はありませんが、関連する史料から天明7年（1787年）頃の絵図であることがわかっています。そして、ちょうどこの頃まで相良藩主は、歴史教科書にもその名前を確認できる人物、幕府の老中をつとめていた田沼意次（たぬまおきつぐ）だつたのです。田沼意次は、享保19年（1734年）9代将軍徳川家重（いえしげ）の小姓（こしょう）に抜擢され昇進を重ね600石の旗本から5万7000石の大名にまでのぼりつめた人物です。10代将軍家治（いえはる）にも重用され、側用人から老中となり「田沼時代」を築きました。

しかし、天明の飢饉への対応がうまくいかず、さらに贈収賄の疑惑など批判が集まるなか、将軍家治が亡くなり、意次は老中を罷免（ひめん）されました※。さらに、9月に11代将軍家斉（いえなり）

が就任すると、10月には2万石の領地と江戸・大坂の屋敷没収と続き、ついに天明7年11月に相良城が幕府に没収されるのです。この相良城の受け取り役を担当したのが岸和田藩主岡部長備（おかべながとも）であり、この時七人庄屋が藩主への御機嫌伺いとして相良へあいさつに参る際に、【図1】が作成されたと考えられます。

【図1】を詳しく見ていくと、中央北側から「東」に向かって「汐入川」（上流は「相良川」とある）が「海」（駿河湾）に流れ、この川から相良城の外堀（「シホ入ホリ」）に水を引き入れています。内堀は本丸（「御殿」）を取り囲むように、さらに二ノ丸にも本丸とつながる内堀がめぐらされており、外堀と内堀の間に三ノ丸があります。城下は城の南東側海までの間に「町屋」があり「市場町」「新町」「福田町」「大横町」の町名が確認されます。城の南西側は「屋敷」と書かれており、武家屋敷が立ち並んでいた場所でしょう。西端に「百ケン長や」とあるのは、足軽など下級武士の住まいと思われます。「大原口」を出ると「此（この）東ニ小松ノ並木五丁計（ばかり）アリ」「金谷へ四り」とあり、ここから、東海道金谷宿に通じる街道が延びていたことをうかがわせます。また、海には目印となる「屏風岩」とともに、船が大小五艘描かれており、海上交通で賑わっていたことが読み取れます。全体に彩色を施し、凡例に白色が「屋敷建物」、黄色が「場并（ならびに）道」、青色が「堀川」、赤色が「神社并門々」として色分けしています。

また、下の絵図【図2】は相良城を受け取りに来た岸和田藩の一行が相良を離れる際の軍備えで、「△御」（=岸和田藩主岡部長備）を中心に、鉄砲・弓・長柄など武器を携えた者や、馬印、馬廻り、供廻り、甲賀士などの軍団が三ノ丸に配置されています。軍団の両側にある「御使番（おつかいばん）」「御留守居」と、「二ノ丸口門」の横に控えている「公儀御役人」はそれぞれ幕府の立会人であると思われ、【図1】とともに作成されたものと考えられます。

意次は相良藩主としては、宝暦8年（1758年）に入封し、明和5年（1768年）築城に取り掛かり、安永8年（1779年）に完成させました。養蚕や、ろうそくの原料となる櫟（はぜ）の栽培を奨励し、瓦焼きを助成して防火対策を進め、食糧の備蓄制度も整備しました。また、相良湊を拡張・整備して、大坂～江戸間の海上交通の中継港とし、さらに相良と東海道藤枝宿とを結ぶ相良街道（田沼街道）を整備した名君として、地元では高く評価されています。

※ 近年の研究で、その後政権を握った松平定信ら反田沼派や一橋家によって作られた悪評であり、先見的な資質をもった政治家として再評価する説が浮上しています。

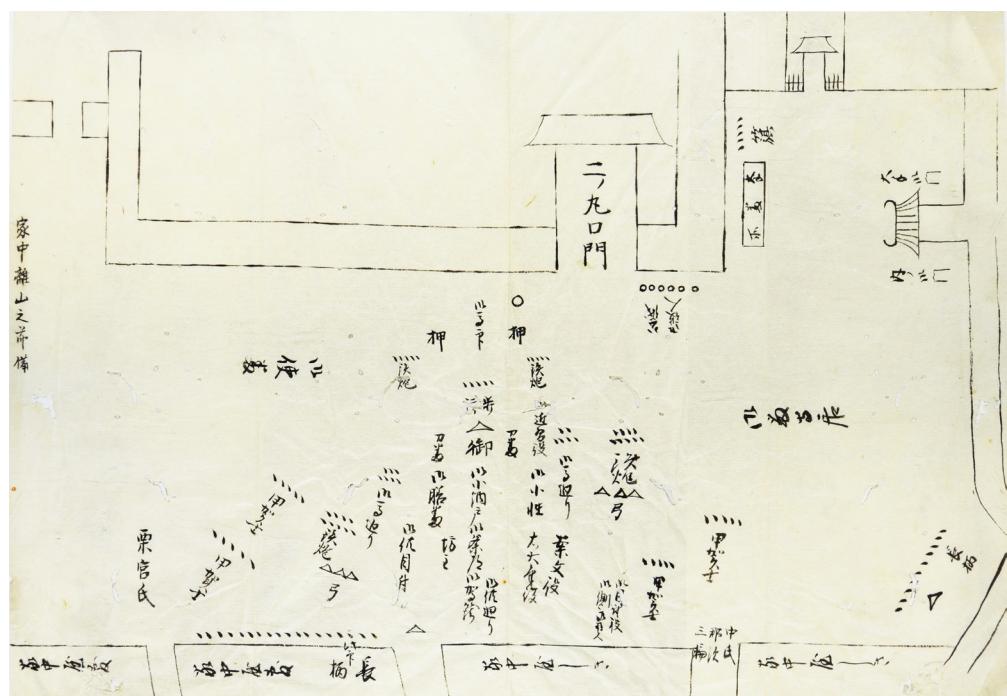


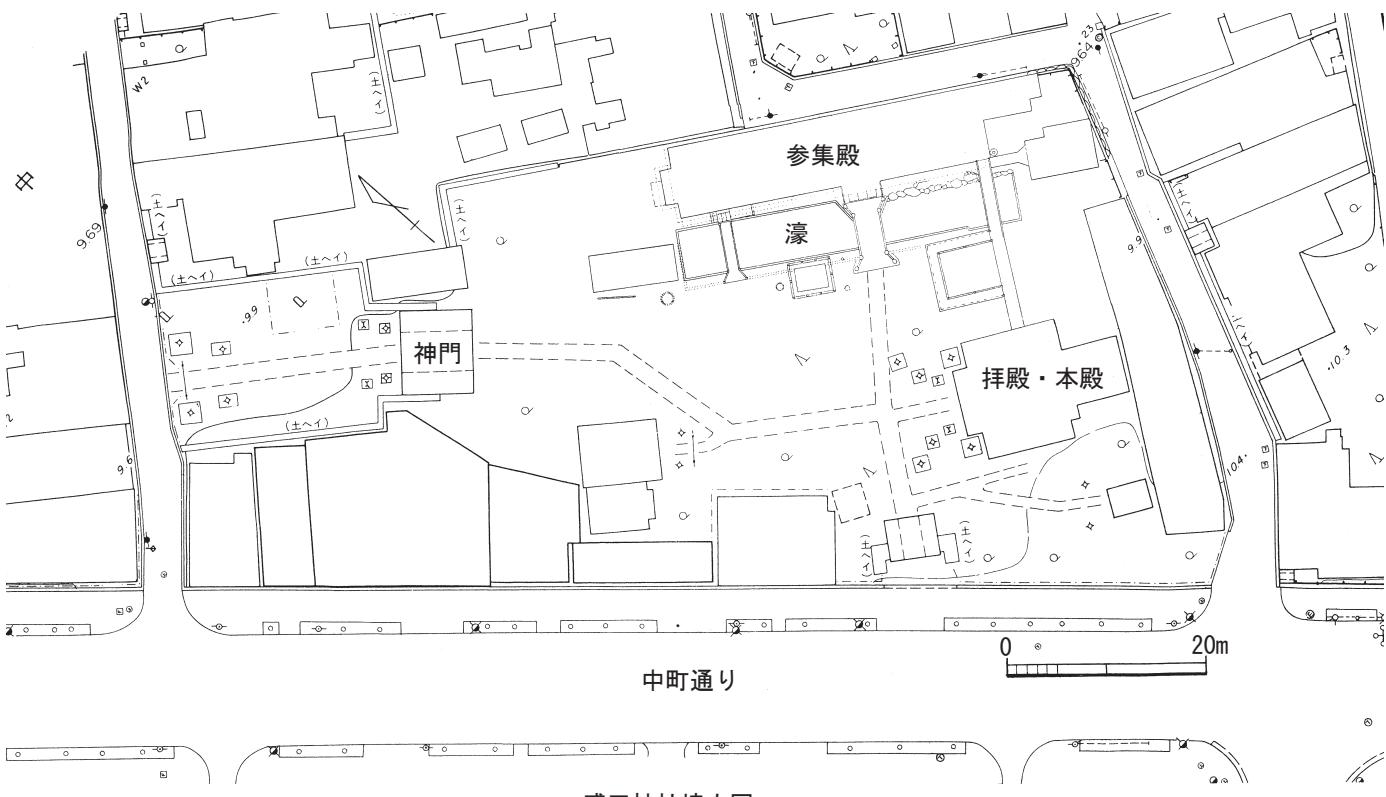
図2 家中離山之節備（かちゅうりざんのせつそなえ） 282mm×406mm <要家文書>

平成 25 年度の埋蔵文化財調査

平成 25 年度の発掘調査は、平成 26 年 1 月現在、遺跡内の確認・発掘調査を 7 件、遺跡範囲外の試掘調査を 1 件実施しました。

今年度の主な発掘調査として貝塚寺内町遺跡内において、感田神社境内に残る濠（ほり）の調査、願泉寺及びト半役所周囲に掘削された堀の調査があります。

感田神社の濠の調査



感田神社は、創建年代は明らかではありませんが、海塚（かいづか）村（現在の海塚（うみづか））の牛頭天王社（ごずてんのうしゃ）と堀村の天神社から祭神を迎えて、陶器のほこらを造ったのが始まりだといわれています。願泉寺所蔵の慶安元年（1648 年）の絵図（表紙参照）には、周りが濠に囲まれた形に描かれています。戦前まで境内の三方に濠が残っていましたが、南西側の濠は昭和 20 年代の中町通りの拡張時、南東側の濠もその後埋められ、現在は境内に取り入れられた北東側の濠が貝塚寺内町の環濠の面影を残す唯一の遺構です。

現在残っている濠は、北西側と南東側の一部が埋められており、長さ 34.2 m、幅 4.8 ~ 5.15 m、深さ 1.3 ~ 1.5 m です。濠の両岸に石垣が積まれていますが、現在参集殿のある北東側はもともと寺内町の外側にあたり、建物の移転に伴って石垣が築かれたと考えられ、平石の隅をたてて積む谷積みという近代の積み方です。しかし、南西側の石垣は方形に整形した石を目が横に通るように積み上げた布積みという方法で築いた、江戸時代に積まれたものと考えられます。



濠の両岸の石垣

今回、感田神社境内に残る濠の規模や変遷を調べるために発掘調査を実施しました。厚さ0.25～0.48mの泥の層が堆積しており、その下はコンクリートでかためられていることがわかりました。後に昭和40年代にコンクリートを流し込んで整備したことが判明し、残念ながら、コンクリートを壊して調査を実施することはできませんでしたが、石垣が5層から6層以上積まれていることが明らかとなり、濠は大きく破壊されていないことがわかりました。今後は、江戸時代の絵図、明治以降の地図、境内の石造物などを調査することで寺内町の濠の変遷をさぐっていきます。



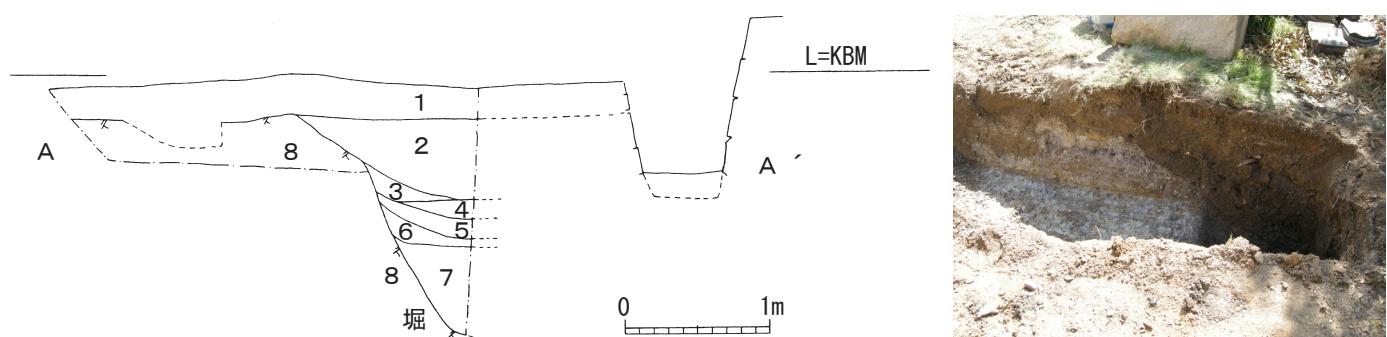
谷積み（北側の石垣）



布積み（南側の石垣）

願泉寺及びト半役所周囲に掘削された堀の調査

今回の調査は、開発地敷地奥に調査区（3m²）を設定して実施しました。本調査区の地層堆積状況は、上層より盛土（1、層厚0.35m）その下は灰白色粘土（8）の地山（自然層）です。遺構は、幅1.3m以上、深さ1.5mの溝で、溝埋土は6層に分けられ、第2層は埋戻し土、第3～第7層は堆積土でした。遺物は第3、第4層から瓦、陶磁器、第7層から陶磁器が出土しました。第3、第4層の陶磁器は印判染付（いんばんそめつけ）で明治期以降のもの、第7層出土の陶磁器は肥前染付の蓋と考えられ19世紀以降のものと考えられます。溝は、願泉寺及びト半役所周囲に掘削された堀と考えられ、推定幅は3m以上です。時期は、出土遺物から19世紀代には三分の一程度まで埋没しており、明治以降に埋戻され、現在の石組みの溝（幅約0.8m）が造られたと推定できます。



遺跡名	調査件数	調査面積 (m ²)	遺跡名	調査件数	調査面積 (m ²)
貝塚寺内町遺跡	2	143.160	三ヶ山西遺跡	1	8.000
加治・神前・畠中遺跡	2	18.325	千石堀城跡	1	32.000
沢城跡	1	4.500	遺跡外	1	4.800
合計				8	210.710

平成25（2013）年度発掘調査一覧表

第 100 回かいづか歴史文化セミナー開催のお知らせ

「春の文化財探訪 寺内町めぐり」

平成 26 年 3 月 22 日（土）に、かいづか歴史文化セミナーを下記のとおり開催します。今回は南海貝塚駅の改札口に集合し、徒歩で感田神社、願泉寺、そして寺内町の町家へと向かいます。当日はこれらの建造物や町並みを見学するとともに、社会教育課文化財担当職員による説明を行います。春を感じながら、一緒に寺内町をめぐりませんか。

日 時 3 月 22 日（土）午後 1 時～午後 3 時（雨天決行）

集 合 場 所 南海貝塚駅改札口

定 員 30 人（申し込み不要）

参 加 費 無料

問 合 せ 先 貝塚市社会教育課 TEL 072-433-7126

当 日 連 絡 先 貝塚市郷土資料室 TEL 072-433-7205



境内には環濠跡や国登録有形文化財の建造物がまとまってあります。昨年その内の一つである参集殿（さんしゅうでん）の改修が行われました。

重要文化財である本堂ほか 5 棟は平成 22 年度に大修理を終え、その後も引き続き境内整備が行われました。春にはト伴椿（ぼくはんづばき）が咲きます。

寺内町にある国登録有形文化財の町家の一つです。異なる 2 棟の建物を合わせており、虫籠窓（むしこまど）にその特徴を見ることができます。

広告募集中

50mm × 80mm（最終ページ） 1 枠

50mm × 175mm（2～7 ページ） 6 枠

詳しくは社会教育課文化財担当までお問い合わせください。

かいづか文化財だよりテンプス 52 号

平成 26 年 2 月 28 日発行

貝塚市教育委員会

〒 597-8585 貝塚市畠中 1 丁目 17-1

Tel (072) 433-7126 Fax (072) 433-7107

Email: shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp

印 刷：株式会社谷印刷所

※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。

年 4 回発行：各 1,000 部

印刷単価： 41.58 円

